

存在の悲哀と無の慈しみ

－ 自覚的経験から見た根本気分 －

嶺 秀樹（関西学院大学）

「哲学は我々の自己の自己矛盾の事実より始まるのである。哲学の動機は〈驚き〉ではなくして深い人生の悲哀でなければならない。」西田幾多郎のよく知られたこの言葉をてがかりとして、哲学的思索の「根本気分」としての「悲哀」の意味を考えてみたい。「根本気分」と言えば、我々は直ちにハイデガーを思い浮かべるが、ここではハイデガーの「存在の思索」からすこし離れて、「根本気分」と哲学的思索の本質的關係にのみ注目することにする。ハイデガーの場合、「根本気分」は存在を開示する機能を与えられた。たとえば『存在と時間』では、「不安」の気分がその役割を果たしている。こうした「根本気分」を西田の自覚的経験の立場に映してみると、いったいどうなるだろうか。

西田自身は「気分」という言葉を用いたことがほとんどない。しかしハイデガーに従って、気分を現存在の本質的契機としての「情態性」(Befindlichkeit)として理解するなら、西田の「自覚」とハイデガーの「気分」に密接な関係があることは十分に予感されるだろう。ハイデッガーの言う「情態性」は、ある場所ある状況において「気分づけられている」という仕方で「自己を見出すこと」(Sich-befinden)であり、西田の「自覚」は「自己が自己に於て自己を見る(映す)」ことである。「自己を見出す」という形式にのみ注目するだけでも、両者はほとんどそのまま重なる。情態性としての気分を「自覚」の一つの契機と見ることは、事柄からして決して牽強付会ではない。気分のような「情意的なるもの」が決して単なる主観的なるものではないことは、西田自身も認めるところである。彼は「知的自覚」も情意的なるものに裏づけられているものと考え、情意的自覚を眞の自覚と見なしていた。

ハイデガーも西田も、思索の始元たる根本経験に立ち返ることによって、西洋形而上学の硬化した伝統の枠組みを解きほぐし、新たな哲学的思索の可能性を追求しようとしていた。一方は、存在の問いを仕上げ、形而上学の根底を問い求めるという仕方で、他方は、東洋文化の伝統に哲学的根拠づけを与え、そこから西洋哲学の諸問題を考察するという仕方で。また一方は、歴史的現存在に立脚した「存在の思索」として、他方は、「絶対無の自覚」に基づいた「場所的論理」として。異なった立脚点に立ちながらも、根本気分を裏

づけられた経験を基礎とし、事柄に即して思索しようとしていたことは、両者に共通である。

「驚きによって人間は哲学を始める」というアリストテレスの言葉を思い出すまでもなく、偉大な哲学者の思索はある独特の気分を動機としている。形而上学の存在忘却のテーゼとともに、現存在の実存論的分析を武器として「存在の問い」を仕上げようとする『存在と時間』のハイデガーが、存在者全体を開示する「不安」の気分突き当たったことは、決して偶然ではない。形而上学の伝統と対決すべく新たな現存在の形而上学を構想せしめたものは、「何故そもそも存在者があって無があるのではないのか」という不気味な問いであった。無くてもよかったものが有ることの不思議、有るものが無に没落していくことへの不安、これらは形而上学の出来事としての根本気分を形成していた。西田が「驚き」ではなく「悲哀」を哲学の「動機」とした時にも、まさに根本気分こそ實在に即した思索を導く不可欠の契機であるという自覚があったと思われる。「形相を有となし形成を善となす」西洋哲学のテオリアの伝統に対して、「形なきもの形を見、声なきものの声を聞く」東洋の無の伝統を対峙させるとき、なぜ「悲哀」が思索の根本気分であると考えられたのか。そもそも「悲哀」とはどのような気分なのか。西田の意識論の根本特徴や行為的自己の自覚の意味を問い求めつつ、思索の根本的気分としての「悲哀」の行為的実践的意味を明らかにしていきたい。